

連載

株式評論家 山本伸一の

兜町スタンダード

記録的調整と「タラレバ」の個人投資家



東日本大震災を切っ掛けとした記録的調整から、二番底懸念後退とともに復調傾向を辿っている株式市場。前回では「大震災から協調介入95年の再演なるか?」と題していたが、協調介入から想定通り為替相場も円安推移を示しており、このまま基調転換が意識される展開となっている。

弊社にも調整局面入りとともに「無料銘柄診断」に問い合わせが相次いだ。その多くが「含み損発生銘柄」の対応に関するものが多かったが、相場の持ち直しとともに性質も変わってきている。コメントでは「あのととき損切っていたら…」、「底値で買っていれば…」など「タラレバ」が増えてきた。

投資経験の長い株式新聞読者ならば、すでに「タラレバ」に処する術を心得ている方も多いだろうが、やはり個人投資家の多くは「後悔先に立たず」の「タラレバ」から抜け出せないことが多いようだ。確かにボラティリティ上昇局面で過去の株価と現在の株価を見比べてしまうことは致し方ないが、重要なのは「その時点」での投資判断であり、結果論を並べても何の役にも立たない。

また、この「タラレバ投資家」の多くは、資産を守るための機動的な「ロスカット」や相場復調を確かめる意味での「打診買い」、調整の長期化にも備える「買い下がり」など「進行形」の戦略が採れないことも影響している。そこで、個人投資家の意識改革を促す意味で資料セット「株の含み損返上術」を作成した。投資スタイルを変えたい方は弊社に直接問い合わせしてほしい。